

元興寺文化財研究所

元興寺は日本で最も古い仏教施設の一つであり、その歴史は千年以上にも及ぶ。その間に、何万点もの遺物を収集してきた。これらの遺物は、現存する建築物、建築材料、寺院の記録文書と相まって、歴史家、考古学者、仏教学者にとって貴重な歴史的情報源となっている。これらの遺物を保存し、研究するために1967年に設立されたのが「元興寺文化財研究所」である。以来、日本の歴史的遺物の発掘・保存・研究の中心的存在となっている。

この研究所は、ある驚くべき発見から生まれた。20世紀に入ると、元興寺はほとんど廃墟と化していた。伽藍は荒廃し、その大半は破壊されるか、失われていた。1943年、辻村泰円（1919-1978）という僧侶の指導のもと、伽藍の修復が始まった。辻村は、禅室をはじめ、極楽堂など中心的な建物の修理に取りかかり、あるときには「ミニチュア五重塔を売ってでも寺の復興に充てる」と宣言するなど、修理費を捻出するために奔走し、伽藍の再生に全力を注いだ。そして、辻村の働きかけにより、政府もその資金を提供することになった。しかし、この修理で救われたのは伽藍だけではなかった。1961年、防火設備設置のために行われた境内の発掘調査で、12世紀から17世紀にかけての遺物が発見されたのである。文書や仏像、数百年前の仏教美術品など、その数は約10万点。これは大変な発見であった。

そのうちの6万5千点余りが、仏教の礼拝や庶民の民間信仰を示す重要な資料であった。1967年、この遺物群は重要有形民俗文化財に指定された。同年、この遺物を研究するために、元興寺仏教民俗資料研究所（後の元興寺文化財研究所）が設立された。

この研究所の最も重要な活動の一つは、歴史的な物や建築物の適切な保存の研究である。数十年、数百年も地下に埋もれていた文化財、特に木や織物などは、出土後に反りや縮みが生じる。このような文化財を保存するために、同研究所は世界に先駆けてポリアクリルアミド処理を採用した。ポリアクリルアミド処理とは、繊維をプラスチックの薄膜でコーティングして強度を高める方法である。これは、日本では初めての試みであった。その後も、研究所ではより効果的な保存方法の研究開発を進め、国宝を含む多くの重要文化財の保存に携わってきた。

法輪館の3階にある小さな展示スペースには、元興寺の出土品の一部が展示されています。このエリアには、古代の材木や寺の歴史を物語る遺物のセクションもある。これらの展示品の中には、仏教の信仰と民間の慣習が結びついた興味深いもの、注目すべきものがいくつかある。たとえば、物忌み札は、物忌みの期間を示すために人々が持ち歩いたり、戸口に貼ったりした木製のお守りだ。物忌みとは、肉類をはじめ、煩惱を刺激するとされる食べ物を断つことである。仏教徒は、死にまつわる穢れを清めるために物忌みを行い、そのお札を故人の扉に貼ったり、遺体の横に置いたりすることもあった。法輪館では、極楽堂に納められた遺骨のために作られた木製塔婆も数点展示している。故人のために塔婆を作る習慣は、本来、塔婆が釈迦の遺骨を納めるためのものであることに由来する。11～12世紀の人にとって、極楽堂の智光曼荼羅の近くに納骨され、塔婆を立てられることは、非常にお金のかかることであったが、浄土への往生を保証するものと考えられたのであろう。

元興寺文化財研究所は、その発展とともに、古文書や古記録、仏像、石造物など、さまざまな考

古遺物を扱うようになった。歴史学者だけでなく、文学者、考古学者、保存修復家など、文化・自然科学の各分野の専門家を会員とする民間組織となった。彼らの努力は、日本の歴史の保存と研究のために重要な役割を果たし続けている。